

元禄期徳島城下における盆踊りの隆盛とその背景

— 地方都市社会史の一断面 —

三 好 昭一郎

はじめに

徳島藩は吉野川中・下流域五郡に亘る畑作地帯に展開する藍の生産と全国市場に対する供給を最大の経済基盤としていた。この流域は米作に適せず、藩政初期のころまでは藍の生産量も限られていたので、藩財政を支える生産力は備えていなかった。元来吉野川は毎年のように大洪水に見舞われ、流域に大被害を与えたので水田化は不可能で、古代から米作に代る適作を模索しつづけてきた。その結果として中世このかた藍の栽培が次第に増加していった。既に室町中期の文安二年（一四四五）には大量の葉藍を畿内に出荷していたことが「兵庫北関入船納帳」の記載によつて確認できる。しかし、当時の阿波では未だ葉藍を加工して^{すくも}薬を作る技術はなく、葉藍のままで出荷していたので、それほど農家経済を潤おすことはできなかったが、そうした状況を脱し^{すくも}薬に仕上げて出荷できるようになるのは戦国末期のことであつた。それは三好義賢が勝瑞城を本拠として畿内で活躍していたときで、その技術は三好氏が勢力を張つていた泉州堺から導入したと考えられている。

その後、豊臣秀吉による四国征伐を経て、天正十三年（一五八五）に蜂須賀家政が阿波入部を果たすと、領域の経済基盤を強化する必要に迫られ、そのための重要政策として撫養塩田の開発とともに、吉野川流域農村に藍の栽

培と加工を奨励し、やがて藍の関東市場への進出もみられ、寛永二年（一六二五）には、藩に藍方役所^②も設置され本格的な藍業の保護と統制に乗り出している。それから約四十年後の寛文期（一六六一—一七二）に至って、藍は徳島藩財政を支える主要産業に成長していった。そこでを徳島藩における藍業の形成段階とすれば、第二段階の成長期は全国的に展開する衣料革命^③を背景として、藩内に大きい転機をもたらせている。

衣料革命とは、つまり国内の綿花栽培が急成長し、市場に木綿が大量に出廻わってきた状況であるが、木綿を染めるには藍が最適であることから、藍の需要が急激に増大するのは自然の成り行きである。徳島藩において藍生産と藍玉の藩外市場進出が急増したのは延宝から元禄期における著しい特徴であった。とくに藍玉の藩外市場への大量進出は、領内における市場の整備と出荷体制の強化を必要とした。

以上のような藍業の急速な発展を背景として、徳島城下には鄉村部の藍商たちの多くが進出して藍店を構えるようになり、なかでも有力な藍商は、藍玉の集散に便利な新町川兩岸の藍場浜や船場町に店舗や倉庫を建て並べ、白壁の土蔵が川面に映え、藍玉を積出す船、藍の栽培に欠かせない肥料を積み入れる船が入りして賑わうようになり、十七世紀末には城下の都市構造も一変し、その景観も一新されていった。それはまた城下における社会構造の変化をもたらしした。つまり、こうして新興商人たちは、十六世紀末以来は羽振りのよかった初期特権商人と代って、城下の町人社会に君臨するようになる。さらに藍店に奉公する鄉村部の農家の二三男や娘たちの大量進出をもたらせ、城下の町屋部分に空地となっていた各町の裏地にも、裏長屋が建ち込んで、急激に埋め尽くされていった。そこにも城下の社会構造を大きく変化させた重要な原因をみることができる。

そのような町人社会の変化は、町人たちの文化活動にも変化をもたらしたのは当然であったが、その一環として城下で最大のイベントである盆踊りにも大きく反映されることを避けられなかった。そのような顕著な変化がみられるようになるのは、貞享・元禄期の盆踊りで、在来の宗教的な要素が後退し、次第に大規模で遊芸的な色彩の強

い踊りに変化を遂げていったことが史料からも読み取ることができる。

十七世紀末の以上のような盆踊りの変化は、必然的に藩の盆踊対策をも変化させる直接の契機となった。当然そこには藍業の成長が深く関わっている。いずれにしても吉野川流域における厳しい自然条件を克服し、成長を遂げてきた藍商たちは、藍玉の販売を有利に展開しようとして、とくに江戸や大坂では顧客を丁寧に接待する藍大儘ぶりはよく知られている。それは顧客に応じて料亭に豪遊したり、歌舞伎や文楽、相撲などにも招待し諸芸に親しむようになるが、こうして身につけた諸芸を城下に伝え、特有の芸能的文化を城下に育てる主要な契機となり、やがて徳島城下が有数の芸処として知られるようになる背景をなしている。

藍商たちが徳島城下にもたらした俄や三味線などの鳴物、また歌舞伎風の華麗な衣裳などは、市中の色街などを介して、このころになると盆踊りの中に受容され、城下の人口増もあつて踊り手も増加することを背景に、貞享期に入ると一丁廻りという、大規模で練行形式の派手な掛け踊り⁽⁵⁾が大流行するようになる。こうして城下一帯の盆踊りは、浮き立つような踊りの渦巻く巷となった。そうした現象を危険視した藩では、その取締りに本格的に取り組むようになったのは当然である。しかし、徳島藩では町奉行に命じて異常な踊りや、町人衆の喧嘩口論などを直接に取締ることを避け、あくまで各町組の自主規制に委ねていることに注目させられる。近世を通じて幕府は江戸市中の盆踊りを厳禁⁽⁶⁾したのを始め、多くの藩でも禁止措置がとられているのに対して徳島藩では、時代とともに規制は強化しているものの、遂に幕末まで踊ることを禁じていないことは特異史実で、そこに藩は城下町人と妥協していた側面も無視することはできないが、その他に町方による自主規制が有効に機能していたことも確かである。しかし、在来の研究がそうした側面を見落としていたことに鑑みて、その理由を明確に把握することも、本稿の一つの課題としてみたい。なお本稿の主たる目的は、徳島城下町の特異な発展がみられる元禄期の都市社会の展開を、盆踊りの隆盛と藩の対策との関係の検討から考察することにある。

一、阿波藍商の活躍と城下の芸能文化

まず徳島藩において元禄期を、藍經濟の一大發展期と捉えるため、延宝六年（一六七八）における五代藩主蜂須賀綱矩の襲封から元禄十五年（一七〇二）までの約四半世紀の前半に研究の焦点を合わせてみたい。このころの徳島城下町は藍玉の諸国市場への急速な進出を背景として、町屋部分の充実は著しいものがあつた。そうして衣料革命の余慶をうけつつ、城下一帯に新たな芸能文化が醸成され、その一環として盆踊りを中心とする民間芸能の高揚期を迎えた。序でも指摘しておいたように、その高揚を先導したのは郷村部から城下に進出し、藩の藍をめぐる流通統制を強化するために、藍玉が集散する生産市場を形成する政策の下で、積極的な經濟活動を展開した藍商や肥料商たちであつたことは言を俟たないが、藍商・肥料商の城下進出を背景に、その下で雇用される奉公人たちの大量流入によつて、盆踊りに加わる人数も急増したことも、城下の芸能文化の変貌に大きく影響した。

さて、藍商や肥料商たちが城下に伝えた芸能として特筆しておかなくてはならないものは、上方から伝えた盆踊りの新たな盛り上がりや俄を始めとする諸芸であるが、直接それらの新趣向が伝えられたのは城下の色街であつた。それが杉屋裏などの色街でアレンジされて盆踊りに取り込まれ、盆踊りそのものを遊芸本位なものに変化させていった。そこで当時の大坂における盆踊りの盛り上がった様子をみておこう。

町踊り、座敷踊り（新町の大寄せ）、芝居踊り（盆替Ⅱ狂言の大切の都風流大踊り）の三つがあり、信仰は薄れ遊戯になつていった。町踊りは庶民の屋外の踊りであり、古くは貞享三年（一六八六）西鶴の『好色五人女』に、鍋島屋敷の前で夜の道念節を歌い、白き帷子に黒き帯の結びめを当風にして踊つたとあり、また江戸中期の新町の門踊りについては、町内の両辻に太夫の長持で関を作つて人を止め、路中蠟燭を灯して昼間のように輝かせ、装いも美々しく朝まで踊つたといふ⁽⁸⁾。

大坂における以上のような盛大な踊りは、盆前後の一个月にも亘って楽しんだという。当時の大坂で阿波藍の販路を拡大しつつあった藍商たちは、このような大坂の踊りを見聞し、踊りに加わった藍商もいたと考えることができ、それを城下の盆踊りにも受容するための媒介の役割を担ったのも自然であった。また、大坂における当時の盆踊りの昂揚は、歌舞伎や文楽などの舞台芸能の隆盛を背景とした現象であるが、もちろん阿波の藍商が顧客のための接待行為を通じて得たものを、城下に還元させたものである。そのうちとくに注目しておく必要があるのが「俄」である。いうまでもなく「俄」とは即興の寸劇や寄席で覚えた噺（落語）や手品の物真似とか、声音を聞かせるもので、藍商たちは酒宴の席でそれらを演じたり、盆踊りで花やぐ昼間の路上で、人びとの集う商家の軒下や辻などで演じ、盆行事を盛り上げるだけではなく、その演技や衣裳などが夜の盆踊りに受容され、踊りに大きい変化をもたらしたことも無視できない。

そのような「俄」こそ、大坂から伝播した代表的な民間芸能であるが、それに関する先行研究は皆無の状態にあるので、少し詳細に紹介しておく、まず「俄」は衣裳俄と走り俄の二種に大別できる。そのうち衣裳俄というのは、歌舞伎や人形浄瑠璃のような華美な衣裳を纏って、太閤記や阿波鳴などの芸題のクライマックスの場面を、瞬時に演じるというもので、それを演じる者と鳴物方や浄瑠璃を語る人を合わすと五人から十人ほどの集団演技であるから大掛かりである。それを子供たちが演じると子供俄と称した。それに対して走り俄の方は手軽で、一人俄ともいつて浴衣掛けという軽装で、先述のように小噺や声音、曲芸や手品を演じたのである。そのため衣裳俄は藩財政が窮迫し、儉約令の下ではたびたび禁じられるが、走り俄は禁じられることがなかったことは、多くの史料によって確認できる。

この「俄」などの諸芸は元禄期から市中で演じられるようになるが、それに対して藩政初期から城下で踊り継がれてきた本来の盆踊りは「有来りの踊り」とされていたもので、幕末のころからゾメキ踊りと呼ぶようになる。こ

の踊りはもちろん城下における盆踊りの主流であつて、本来は盂蘭盆の精霊踊りとして町内に祖霊を迎えて供養する踊りである。そうすると俄はあくまで有来りの踊りの脇役であるに過ぎず、ただ盂蘭盆の昼間に演じたが、俄を演じた者は夜に入ると有来りの踊りにも加わつたので、伝統的な踊りの衣裳や芸態に変化をもたらず決定的な要因となつたことは否定できない。また城下を中心に阿波全域で俄がお座敷芸として定着し、酒宴を盛り上げたのも元禄期以降のことだといわれ、こうして俄が城下の色街が仲介しながら、広範に伝播した背景には、元禄期における活気に満ちた商業活動^⑨の展開があつたことが当然考えられるが、それについては先行研究もなく、掘るべき史料も入手し難いが、今後の重要な課題であることは確かである。

さて、徳島藩の藍商たちにとって延宝期から元禄期に至る衣料革命の段階は、全国の藍市場への進出の好機となつたことは先述しておいた通りである。その段階こそ徳島城下の都市構造の整備がすすみ、とくに町屋の整備が急速にすすんだ段階だと考えられている。いっぽう武家町についてみると、元和元年（一六一五）の一国一城令による阿波九城^⑩の廃城化と駐留家臣団の城下集住のため、城下町の再開発事業に着手され、その終了も元禄初期のことであるので、その意味でも城下の都市景観はもとより、その社会構造も一新されたのが元禄期であつたことには注目しておきたい。こうして城下に定住するようになった武家の間にあつても元禄期には藩政初期の緊張関係は大いに緩み、眼を見張らせるような町人文化の展開は、次第に武家の間にも浸透し、諸芸能に興じる多数の武家を輩出するようになったことも、また元禄期における徳島城下における芸能環境の大きい変化であつた。以上のような武家の民間芸能に対する接近は、藩にとっては由々しい事態で、その対策として藩では、武家が諸芸能に泥むような風潮を断つために、盆踊りや三味線を好む家臣たちを、厳しく取締ることに尽力したところに、当時の徳島藩の芸能対策の特徴を見出すことができるであらう。

二、貞享期徳島城下の整備と盆踊りの巨大化

既に貞享期の徳島城下では、盆踊りが大規模なものとなり、俄などの影響もあつて遊芸的な踊りに変容し、その取締りも容易でなくなつたことは当時の藩側の史料からも類推できる。そこで藩としても踊りの変化に対応して、規制を強化していることは当時の町触に注目しなくてはならないことであるが、踊りの様相を具体的に捉えるための町人サイドの記録は現時点では入手できず、町触などの藩側の史料の行間から読み取る以外に手立てはない。そのような方法を用いて推察すると、ほぼ次のような態様が浮かび上がってくる。

城下の町人社会では、藍商などを介して大坂における民間芸能や舞台芸能の影響を強く受けるようになる。それは前説で紹介したように、大坂における盛り上がった状況が伝わる反面、江戸市中の場合は対照的に公儀は盆踊りを厳しく禁じている。とくに江戸市中の禁令が出たのは貞享二年のことであることに注目しなくてはならないだろう。そこで江戸市中の状況について史料に基いて立ち入った考察を加えてみよう。

公儀は江戸市中の盆踊りに対して、近世初期には保護奨励策をとっている。そこには「町々之内にて躍なと致とて必留間敷候、盆二はいつもにきハひおどり候まゝ、おとり可申候^①」として、町人が無事平温の世を謳歌して踊ることを放任する姿勢を打ち出している。同時に踊りを禁じる場合には、反幕的な行動に出るという危険性を配慮していたことも否定できない。それだけ幕府による支配が不安定であつたことは明らかである。ところが貞享二年に至つて慶安期の対策を大転換する。すなわち「頃日町方にて寄合、おとり候由相聞え候、子とも之踊なとハ格別、其外町人寄合、道辻ニて往還をさまたけ、おとり候ハ、曲事可申付者也^②」と命じているように、慶安から三十六年を経て全面禁止という厳しい措置を講じている。その背景にいったい何があつたのであろうか。その究明は重要な課題であるが、ここでは深く立入ることを先送りして貞享規制を検討すると、町人が寄合つて乱舞することで、風

俗を乱すことはもとより、そのエネルギーが幕府の支配に向けられる危険性を封じ込めようとしていることは明らかであろう。その背景には江戸市中の社会構造が大きく変化してきたという事情があることに、十分な注目を向ける必要が生じたことも否定することはできないだろう。

さて、徳島藩の場合にも貞享期の城下町をめぐる状況は、大きく変貌を遂げつつあったことは明らかで、そのことが盆踊りを大規模なイベントとして展開されるようになり、それを藍商たちが介在して大坂における隆盛を城下に取り入れた反面、江戸における公儀の抑圧政策も無視できなかっただけでなく、城下の盆踊りの盛り上がりに対しては、一定の歯止めをかける必要が生じていたことも否定できず、そこに踊る町人層と藩権力の間に新たな乖離現象を生じたものと考えられる。

確かに城下の盆踊りの当時における大規模化は、在来取締りの機能を麻痺させ、踊る群衆が路上を雑然と埋めつくし、喧嘩口論の多発も予想され、急速に盆行事としての宗教性を薄めて遊芸化することによって、伝統的秩序を混乱させ風儀の悪化が避けられないと藩権力が判断したはずで、踊りをさらに盛り上げて盆景気という経済的な効果を期待していたことも明らかである。しかし、そのように領主側における二律背反の矛盾が生じたというところに、貞享規制の特徴をみることができよう。それは取締りの対象を武家に集中していた寛文規制^⑬との決定的な相違点である。

徳島城下における以上のような新たな状況下に、藩権力が打ち出した貞享規制^⑭がもっている政策的意図がどこにあったのか、問題点を摘出しながら考察すると、まず第三条に注目させられる。そこには「踊場え罷出候者共、踊人を始頭巾・覆面・笠着申義、惣て何様之品を以隠面容紛敷義、御停止之事」と規定しているところに、踊り子が面容を隠すことを領主側は警戒していることが知られる。もとより踊りの直接の取締りは、前述したように町組ごとの自主規制に委ねていたので、具体的には年寄や踊りの願人とその補助者によって違背者の面容を見分けて取締

るのだが、踊りが大規模なものとなり、一丁廻り⁽¹⁵⁾というような隣合う町々に踊りの集団が掛け合う形式が登場すると、どこの町組とも見知らぬ群集で混雑することは避け難く、町役人らで取締ることは不可能となる。面容を露わにさせようとするのはそのためである。就中武家が踊りに加わることをもつとも警戒したことはいうまでもないだろう。

第四条はとくに重視しなくてはならない。そこには踊り子だけでなく、見物人をも取締りの対象としていることに注目しておきたいのである。その内容は「見物之者共簾懸申義御停止被成候、其外戸障子を立物影よりの見物可為無用、並隔子之内可為同前事」と規定する。つまり、屋内にいて見物する者も面容を隠してはならないと命じたもので、不審者が屋内から見物していることを即座に判断しようとする規定となっている。ときに路上で乱舞する踊りの集団を煽動したり、隙をみて屋外に飛び出して喧嘩口論を始めるような行為を徹底して防止しようとする治安対策的な規定となっていて、領主側がどれほど当時の盆踊りの新たな動向を危険視していたか、その一端が窺い知られるであろう。

徳島藩にとって貞享二年（一六八五）は、藩祖の蜂須賀家政が阿波入部を果たし、徳島築城と城下町の町割に着手したときから、丁度百周年という区切りの年に当たるが、この年の町屋の各町と、それぞれの戸数と町の規模は次表のようになっている。

この表と比較できる前後の史料はないが、寛永から享保期に作成された城下絵図と比較検討することはできる。それからすると当時は郷村部から城下への戸数と人口の集中がはげしく、初期の町屋部分には居住できない小商人や奉公人たちが郡奉行の管轄する郡町に住みついて軒を並べるようになってきたことが知られる。またこの表には未だ見られないが、同様の理由で二軒屋や佐古村の町場化もすすんでいることは、古地図で確認できることで、やがて元

城下町別戸数

| 町名 | 戸数 | 延長 |
|---------|-------|-------|
| 紙屋町筋 | 87戸 | 3.00町 |
| 紀伊国町筋 | 87 | 3.00 |
| 通町筋 | 76 | — |
| 新し町筋 | 101 | 3.00 |
| 西横町 | 34 | — |
| 魚町 | 42 | 1.25 |
| 東船場片町 | 5 | 1.09 |
| 西船場片町 | 18 | 1.09 |
| 福島片町 | 47 | 3.40 |
| 助任片町 | 57 | 3.40 |
| 助任裏 | 19 | 1.12 |
| 横手 | 12 | 1.01 |
| 横手裏 | 17 | 0.44 |
| 新町橋筋 | 12 | 1.21 |
| 鍛冶屋町筋 | 92 | 4.10 |
| 富田町筋 | 48 | 1.33 |
| 紺屋町片町 | 12 | 0.37 |
| 桶屋町 | 28 | 0.39 |
| 新魚町 | 35 | 0.53 |
| 湯屋町 | 15 | 0.53 |
| 刻町 | 14 | 0.38 |
| 新町東船場片町 | 11 | 4.00 |
| 新町西船場片町 | 49 | 4.27 |
| 大工町筋 | 123 | 3.47 |
| 新小橋筋 | 50 | 3.00 |
| 下代町 | 19 | 0.46 |
| 法華寺町 | 15 | 0.57 |
| 西新町筋 | 174 | 5.46 |
| 西新町山路片町 | 21 | 2.11 |
| 佐古町 | 155 | 9.00 |
| 計 | 1558 | 93.05 |
| 市中人数 | 25590 | |

※『御大典記念阿波藩民政史料』
上巻により作成。

禄期には一旦城下に編入される。さらに湯屋町などの新町組の裏町も長屋住いの移入者たちで埋まっていた状況を読み取ることができる。

以上のように城下の変容は急速で、経済活動も次第に大型化したのが延宝から貞享期の特色である。しかし、藩財政の窮乏は甚だしく、町屋の繁栄とは裏腹に武家は生活のやりくりに四苦八苦の状態で、藩主といえども決して例外ではなかった。それに不満な多数の家臣たちが、ストレスを発散させるために盆の市中にくり出して、寛文以来の禁令を犯して踊りの群に加わっていたであろう。そのことは盆踊りの取締りをさらに困難にしていたものと考えられる。それに関しては別稿を予定しているのでここでは取り上げないが、次の史料は財政難に苦しむ四代藩主綱通に関する興味深いものである。

欲獲其書、書肆以其未上梓、呈繕本一部曰、直三十金、若不称旨、請期五日見返、公覽之、謂侍臣曰、此年国用不足、減諸士俸禄、而今費三十金、以供所嗜好、意所不安也^⑬

この一文で延宝期の藩財政が破綻寸前にあったという事情を垣間から窺えるであろう。それは五代の綱矩伸の下でも好転せず、「天和元年辛酉十月、以用度不足、収藩士俸禄十之一、十一月請幕府始造楮幣、行封内^⑭」とあるよ

うに、家臣の知行の一割を借上し、貞享四年には半減しているが、事態は一向に好転することがなかった。そのため「公帰国、三年癸亥正月、以賀嶋重郷主水為仕置、重郷、重玄子也、貞享四年丁卯九月、風雨敗稼、免藩士収禄十一之半」¹⁸⁾とする措置に転じなくては、家臣の窮乏に歯止めをかけられなかった。

そのいっぽうで藩は、悪化しつづける財政を立て直すため、当面の困難な状況に耐えながら、吉野川流域農村における藍生産を奨励するとともに藍商に保護の手を差し延べて、阿波藍を諸国市場に独占的に売り込むことをめざした。これが成功すれば、そのことを挺子として藩財政の再建に連動させることができるという意図をもつて、藩は藍の流通過程に深く介入し始めた。こうした藩の政策転換は当然のように新興の商人を保護する反面、長く藩政を支えてきた初期豪商の没落を黙殺するという苛酷な一面をみせながら、城下の町人勢力は明確な新旧交替期を迎えたのが延宝・貞享期であった。そのことを象徴する現象として、藩政初期の城下を賑わせた春日神社などに奉納していた組踊りが衰退し、代って新興商人がもたらした俄が大流行している。そのような町人社会における新旧交替を確認するため次の史料は注目しておきたい。

一、紙屋町之者とも願出候は、紙商売之義彼町迄被仰付旨御代々御判物被下置候、然処ニ、郡町にて商売仕迷惑之由訴出候ニ付承届、佐古・富田・二軒屋・助任・右郡町にて紙商売停止被仰付旨、速水助七ニ申渡之、
庄・蔵本之義も紙屋申出候得共、是は郷中之義故差除之¹⁹⁾

紙屋町に紙商売の店を構えていた紙仲間商人たちは、藩政初頭の元和二年（一六一六）以来、藩から「紙類売買之義寺島古町へ申付之条わきわきにて致取沙汰義令停止者也」²⁰⁾とする御判物を得ていて、紙を独占的に売買する特権が与えられていた。ところがその後、領内の紙生産量も増え、紙屋仲間に納めたあとに余剰を生じるようになると、徳島城下に隣接する郡町・脇の町に店をもつ新興商人たちが、余剰の紙を仲間より有利に買上げられるようになったので、これらの郡町や庄とか蔵本村のような郷町でも紙が売り出されることになったものと考えられる。こ

うした新たな状況は特権的紙仲間の商人にとっては、在来の特権を揺るがせるほどの危機と捉え、貞享三年（一六八六）に紙の新規商売を停止させることを藩に訴え出ている。この段階には藩として元和の御判物の線に沿って、郡町における紙商売の停止を命じ、紙仲間の特権を追認しているが、しかし、庄・蔵本村などの郷分の場合には紙仲間の特権は及ばないとして、紙の売買を認めている。この措置は明らかに在来からの紙仲間に認めていた特権の一部を藩が切り崩したものである。藩のそのような措置は新興の在方商人からの新たな口銀が収取できることを期待するという政策の部分的変更を意味するものとして注目すべきである。同様のことは内町の魚商人と新興の新魚町との間にも発生していることであるが、紙の場合についても、その後次第に紙仲間の特権が剝奪されて新興商人の手に主導権が移されていくのである。

これら特権商人たちは、各町組内にそれぞれ君臨していて、町内の平和や商売繁盛を祈るため、各氏神の祭礼に際して丁内ごとに組踊りを奉納していた。組踊りは中世以来の風流の伝統を継承するもので、各丁ごとに百人前後の踊り手が豪華絢爛の踊りをくり出したのである。その詳細な記録に慶安三年（一六五〇）の「春日祭祀」がある。しかし、そのご半世紀後の元禄期前後のころになると、こうして都市イベントを支えていた特権商人たちの衰退とともに、組踊りは盆行事の昼間に移されて、たびたび華美な踊りとして停止させられている。そこに初期特権商人勢力が後退していった事情を窺い知ることができるが、そのことに関しては以下の各節の中で、必要に応じて取り上げていきたい。

いずれにしても初期の組踊りは、決して信仰を前提とした踊りではなかったが、それを演じるための建前として、氏神に奉納するという名目で藩から保護されていたことは明らかである。もちろん組踊りとは別に有来りの踊りとされていた城下の盆踊りも、その発生する段階から町人の側では盆踊りと規定することによって、祖霊とする死者を各丁内に迎えて供養するためにともに踊り、七月十六日には仏の世界に送り返す踊りで最高潮に達し、三日間の

盆行事に幕が降ろされるが、そこまでは宗教的要素を前面に出すが、いよいよ最終日の深更に達すると、踊る人びとは口々に「盆返せ」と絶唱して乱舞したところに、町人各層の間では毎年一度の盆踊りを心底から楽しんでいた状況を知ることができる。さらに一七世紀末の貞享期になると、城下は藍や肥料の取引が活発に展開されるようになることを背景として、城下に人口が集中し出すと、町屋の至る所に店舗や住宅が建ち並び、裏地の空地にも長屋などが立て込むので、幕政初期以来の空地が急速にみられなくなっていく。そのような都市構造の変化は必然的に盆踊りの形を変えていっただけでなく、踊りに加わる新来の人びとも増え、また見物人も大挙して市中にくり出すので、盆踊りの三日間は狭い城下の路上は、人で埋め尽くされて雑踏の巷と化すほどになった。それに対して藩では町役人を介して貞享二年には取締りを格段に強化せざるを得なくなったが、町屋の変化がピークに達した元禄期を迎えると、取締りはさらに厳しさを強めざるを得なくなる。こうした状況に輪をかけるようにして、盆踊りの伝統的な宗教性が薄められ、この段階には遊芸的な性格が顕著な踊りに移行している。その変化が藩にとっては武士社会に影響を与えることに警戒を強めたのも当然の成り行きであった。

以上が第一、第二節で述べてきた歴史的な経過の要約であるが、いよいよ次節で元禄期の動向を把握しようとしても、その経済的背景についても、盆踊りの展開を中心とした芸能史上の史料についても、極めて乏しい現状にある以上、貞享以前の城下町の形成や芸能的環境が生まれたかについて考えるためにも、できる限りその諸背景と関連させた考察が求められる。そのため若干煩雑化することを覚悟のうえで、こうした要約をしておいた次第である。

三、元禄期の経済動向の特色と盆踊りの高揚

元禄期の徳島城下では、藍商たちの全国市場進出と藍栽培に不可欠な金肥取引きの大型化によって郷村部の商人が城下に店舗を構えて経営に乗り出すと、城下の都市景観は一変するとともに、社会構造のうえにも著しい変化を

もたらせる。先述のように徳島藩経済の主導的地位も、在来からの特権商人から藍商や肥料商人などの新興商人の手に移っていった。これら新興商人についても先行研究では城下における町人文化形成の主体は、すべて藍商たちに集中しているかのように論じられてきたが、むしろ肥料商の動向に注目しなくてはならないことが、徐々に明確化してきた。もちろん藍商が肥料商を兼ねることが多いことは否定できないが、今後の研究に当たっては肥料の流通に視点を据えて検討することが避けられない。その意味で本節を執筆するうえで、領内における肥料取引の結節点としての城下の状況に意を用いていきたい。

阿波の発展期が元禄期に指定されて⁽²⁾いて、その結果として、元禄十五年（一七〇二）に江戸仲間の者二人が徳島藩江戸屋敷に、二千両の上納を条件に、阿波から出荷するすべての藍玉を独占販売させて欲しいと願い出たという逸話が『徳島県史第四巻』⁽³⁾に紹介されている。確かに阿波藍に対する需要が増大していたことから語られたもので、決して史実とは考えられないが、このようなことがまことしやかに巷の噂になるほど阿波の藍玉が人気の高い商品であったことは否定できない。

その後の藍市場では阿波藍のことを本藍などと賞賛され、それ以外の地で産した藍を地藍と称し、本藍と地藍の間には越え難い格差が存在していたことは否定できない。その証拠の一つとして時代が幕末まで降るが、他国藍を閉め出していた広島藩内で、三原町の紺屋仲間が染めの最後の工程だけでも阿波藍の使用を許して欲しいと、きわめて切実な嘆願書を藩に差出している。なぜ阿波藍の品質がそれほど優れていたかといえば、吉野川流域の自然環境が藍の栽培に適していただけでなく、つねに加工技術を改良し良質の染に仕上げていたことや干鰯、後には鰯粕などの高価な金肥を惜しまずに使用していたこと、さらに徹底した集約農業の実をあげたこともある。そのうえ藍商たちの藍玉売り込みの努力も並み大抵のものではなかった。そのような成果が元禄期となって大きく開花するようになったことは確かである。

元禄期における阿波藍業の急速な發展は、徳島城下の変容と城下の人びとの生活や文化の様式をも変化させていたことは前述した通りであるが、とくに藍商や肥料商の積極的な活動の場として色街の拡大をもたらせ、それを契機として芸能文化の昂揚もみられるようになって、町人各層の間はもとより武家社会にも新たな芸能文化が受容され、三味線や俄に興じるような状況が生じることになった。そうした変化は当然のように宗教的で素朴な藩政初期以来の盃蘭盆の行事としての盆踊り¹¹有来りの踊りをも急激に変化させずには済まされなくしていった。いうまでもなく武家の多くも寛文期以来の武家に対する盆中禁足令を無視して市中の踊りに加わる者を著しく増加させたことは否定できない。こうした武家の動向が市中の話題となるだけではなく、踊りで賑う市中に喧嘩口論が多発する結果をもたらせたことは、藩による取締りを強化しなくてはならない事態を迎えたことを意味している。そこで元禄元年（一六八八）には、早くも藩の本締は町奉行の中内惣右衛門に対し、次のような書状を出して盆踊りを正常な踊りに戻させることを命じている。その史料を次に掲げて検討してみよう。

一 於市中盆踊之義、如例年十四日より十六日迄御赦免被成候事

一家々火之用心堅可申付事

一 躍場え罷出候者共躍人を始頭巾・覆面・笠着申義、惣て何様之品を以隠面容紛敷義不可仕、然共、十五歳以

下之子供は頭巾・覆面・手拭可用之事

右之通被仰付候条、可被得其意候、以上

辰ノ七月

件之趣、中内惣右衛門申聞承届之、以書付申渡之²⁵

この史料のうち第三条は、貞享二年の町触で禁じていた覆面などで面容を隠して踊ってはならないとするものに追加して、十五歳未満の者を子供と規定し、子供に関しては頭巾着用などによって顔を隠すことを命じているところ

ろに注目させられる。そこには子供を取締りの対象から除くことによって、藩による規制に違背するような踊りや衣裳の着用が発覚するとき、子供には目もくれず面容を顕わしている者、つまり、大人だけを捕縛すればよいとしたことで、取締りを容易にしたところに特色をみせている。そのような新しい規制を命じている背景には、この期に至ると貞享期以上に盆踊りが大規模化し、一丁廻りにくり出す踊り集団と、見物人によつて路上は埋め尽くされて混乱し、身動きもできないほどの雑踏によつて、城下は湧き返えるような状態をみせるようになってきたことを意味している。そのころには城下近郊の郷分からも踊り込む集団が増加するとともに、夥しい見物人も殺到して路上は立錐の余地もないほどに埋め尽くされたのであるから、もはや町役人による監視も行き届かなくなり、城下周辺の御山下二十一か村（城下周辺の郷村部）から、町奉行の要請があれば郡奉行の指示で、屈強の者たちを市中に派遣し、町役人に協力させる体制も整えられるようになったものと考えられる。

以上のように市中が盆踊りの高揚で大混雑すると、寛文規制によつて盆中は禁足を命じられていた武家の多くも、雑踏に紛れて市中に踊り込むという状況も増えてくる。それを放置しておくと言論が相次いで発生し、藩にとつてはもつとも厄介な事態を生じるとすることも予想されたことから、その取締りを担当する町横目が、踊っている武家を摘発し易いように、面容を顕わにすることを命じたことは明らかである。いづれにしても藩にとつては、武家が町人文化に馴染むことを極端なほど警戒していたが、それは徳島藩だけに限られた方針ではなく、もつとも早期に盆中の武家禁足を命じた鳥取藩の場合を始め、丹後宮津藩や岡山藩など多くの藩が同様の措置をとっていることから、諸藩でも共通の危機的意識をもっていたものと考えることができる。また次の史料にも注目すべき新たな動向を感得することができるであろう。

於市中盆踊之子供御家中へ被雇踊申段聞及候、就夫近来ハ其組ニ有歳長候男女共相添罷越裁判仕候趣相聞候、右之段有間敷候間此後七月市中之子供五人三人被雇罷越候共歳長之男參候義堅令停止候、右之段市中相触可被

申候

七月三日

以上

津田角兵衛

福本作兵衛殿

小杉藤右衛門殿²⁷

この史料では家臣たちが市中に出て踊ったり、踊り見物することを厳しく禁じていた。しかし、それぞれ屋敷内で踊ったり、踊り子たちを招き入れて踊ったり見物することは寛文規制でも許されていた。それについては「侍中屋敷にて躍之義盆三日不苦、尤、門をとり喧嘩口論無之様可有之事²⁸」と規定していた通り、屋敷内で踊ることは許されていたが、武家とすればそれでは盆踊りとしては盛り上がりならず、淋しい踊りで興が湧かないのは当然である。

そのために踊り集団を屋敷内に雇い入れて共に踊ったり、踊りを見物することが家中の間では流行していたことをこの史料は伝えている。そこには武家屋敷だけではなく、商人たちが催す宴席などにも、声が掛ければ出向いて踊りを披露する集団が形成されていて、盆踊りの興行化が当時においては流行していたことを読み取ることができ、こうした商品化し洗練された踊り興行の集団が、城下の盆踊りの遊芸化を先導したものと考えられる。

ところで史料には、三人から五人で編成する子供の踊り子集団が多数あって、屋敷内や宴席に招かれて踊っていることが知られる。そのような子供集団は、既に貞享期から市中に活動していたものと考えられるが、元禄期になると大人が差配して、子供たちの働きから収入を得るといような、子供を利用した踊りの商業化が展開していたことが記されていることは興味深い。子供たちが招かれて踊ったのは武家屋敷に限ったのではなく、商人たちの宴席などにも招かれて踊っていたが、武家屋敷の場合のみ大人による差配を禁じているのはなぜであろうか。その理由を知ることのできる史料は発見されていない。しかし、当時の動向に基いて考察すると、子供たちを招き入れた武家が、子供を差配する大人たちと武家が入替って、子供たちを率いているように振舞いながら、市中に踊

り出すこともできるので、身代わりができる機会を奪うための対策として規定されたものと判断することはできるだろう。それは子供たちとともに市中に出て踊ることができ町人たちの場合とは決定的に異質な措置であった。

藩による武家に対する取締りが、この段階に至って強化されたのは、城下の町人文化、就中芸能文化の隆盛が武家の間にも反映し、三味線や踊りに馴染む武家が急増したこと、そのような傾向が佐古村や二軒屋という城下に隣接した郡町に許されていた諸芸興行に頻繁に足を運んだり、ますます繁盛するようになった料亭や茶屋通いにうつつを抜かす武家の姿も珍しくなってきた。それは藩とすれば武士の軟弱化と見られた。そのため民間芸能に親しむということは武士にあるまじき恥ずべき振舞いと決めつけ、巷間で踊りに狂じる姿を見られたり、屋敷から三味線の音が聞こえることも武士の威信を失わせる行為とする判断が示されるようになった。さらに藩財政の窮迫した当時にあつて、町人社会では藍や肥料を中心とした城下の商況は活気に溢れ、それまでの商品流通機構も甚だしく改編されたことにより、藍商を頂点とする新興商人層の台頭が著しくなると、色街の賑いは眼を見張らせるものがあり、その繁栄を基盤として民間芸能を含む町人文化の展開は急激に人々の心を捉えていった。

藩の財政危機と町人勢力の台頭、この甚だしい矛盾の狭間にあつて、藩は武士を町人文化の影響から遠ざけ、このころから形造られてくる武士道に沿った生き方を藩では求めていったのである。

そこで城下の町屋が大きく変化していった当時の模様について触れておこう。城下でもとくに色街は活発な商況を反映して拡充と繁栄の一途を辿り、そこでは三味の音と歓声の聞こえぬ夜もなかったという。そのような動向を藩にとっては風俗の紊乱と捉え、とくにそれが武家社会に反映することをもっとも恐れたのは当然である。藩が放任できないとした状況とはどんなものであつたか、少し時代は降る安永二年（一七七三）の史料によつて検討してみたい。

市中之儀、前々より屹度作法も相立有之義二候処、近頃ハ不弁之者有之、兼て御禁之売女等指置、自然と不心

得之者入込候様之義も有之趣ニ相聞候、就中、近来料理屋跡之者多、其内ニハ不埒者不筋之心得より御家中風儀御作法ニも相懸候義とも有之趣、別て不届之事ニ候、兼て町役人共急度相心得、不届者有之ハ其段夫々早速可申出候、万一當時其通ニ仕置、追て相頭候ハハ、本人は勿論、役人迄も稠敷可被仰付候条、此段夫々可申付候、尚又町同心之者其時々打廻り、胡乱ケ間敷義等見聞及候ハハ早速申出候様、可有了簡旨、町御奉行以覚書申渡之²⁹

この史料は元禄期のものがないので、かなり後世のものを出しておいたが、多分このような色街の動向は元禄期から城下において顕著になり始めたと考えてよい。元禄も十八世紀前後から、この安永の史料と同じように、藩中枢から町奉行や町役人に命じられていたであろうが、この史料でも藩がもっとも憂慮したのは売女の増加などの現象で、それが「御中風儀御作法上も相懸」る由々しい事態と認識しているところに注目すべきであろう。そのようにこの史料の特色は、表面上では売女を置いて営業することを禁じているが、それも商業活動に活気を与えるための必要悪として黙認し、取締りの対象を武家に集中しようとする藩の意図を読み取ることができるところである。

経済発展が著しかった元禄期の徳島城下では、次第に城下に移り住む鄉村部からの流入枠にも限界を生じ、必然的に主要街道筋に商家や市中に働く奉公人や行商稼人が居住する長屋などが建て込んで、郡町が形成されることによって、郡町が城下町の町屋部分の機能を補完できるようになった。これは城下町が実質的に鄉村部に向かって拡張したことを意味するが、こうして二軒屋・佐古村・助任村・福島郷町などの町場化が、この段階には顕著に進展した。しかし、これらの郡町は元禄五年（一六九三）までは郷分に据え置かれ国奉行の支配下³⁰にあった。その市街化の進展は郷分とは異質で、国奉行支配には多くの矛盾が表われるようになり、やっと元禄六年卯月八日に四つの郡町ともに城下町に編入されて町奉行の支配を受けるようになった。その状況については、次の史料によって確認しておくことにしよう。

一先頃御城下郡町之義、町御奉行支配ニ被仰付候由、因之、御国奉行中件之町棟帳相改、津田覚兵衛方え相達候由ニて、覚兵衛指出候ニ付、帳面十冊逐披見候上、勝手次第右御奉行中申談可請取旨、覚兵衛方え申遣之、帳不残差戻候、帳面目錄写左之通^③

(下略)

この棟帳の目錄には二軒屋町家数六一軒、佐古郡町一一二軒、助任郡町二九軒、福島郡町(福島築地)三軒の合計二〇五軒が城下の町方に編入されたことを伝えている。

しかし、それら新たに城下に編入された旧郡町には、長期に亘つて国奉行の支配下にあつて、町奉行の管轄下に転じて、隣接する郷村部との複雑な関係は一挙に解消させることはできず、とくに訴訟などの取扱いには困難が伴なつた。そうしたことから同十五年(一七〇二)五月には、すべて郡町に引き戻す措置がとられている。

覚

御城下郷町之義、先年一統二市中え御付被成、町奉行支配被仰付候、雖然、此度以前之通郷町ニ被仰付候条、向後御国奉行処支配可致候、且又、郷中之者共市中え罷出候砌、市中之者郷中え罷出候節、其旨御奉行処え申出候内、当分預置度由何れより申聞候共、其処之者共可得其意候、尤、右之外もの共たりといふとも、子細有之惣て付届仕候ハハ、請持他慕仕セ間敷由御意候 以上

五月十八日^④

以上のような措置がとられても、これら郡町の発展と賑わいは止まらなかつた。とくに二軒屋の金毘羅社一帯と佐古村の大谷は、城下では禁じていた芸能興行が許されていたこともあつて、その賑わいは城下の町方にも劣らなかつた。しかも、元禄期からは四国霊場の十七番札所井戸寺と十八番恩山寺間を往来する遍路の通過地点となつたので、遍路宿や飲食の店なども軒をつらねていて、他国からの遍路の出入りでも賑わつた。こうして郡町の町

場化は留るところなく、藩では幕末の嘉永期になると、これらの郡町は再び城下に編入されている。中でも金毘羅社の鎮座する勢見山は、この社が城下の町屋に最多の氏子をもつていて、正月の初詣で客や秋の祭礼には氏子たちも押し寄せて混雑した。またこの一帯はまた桜の名所で知られ、春の花の会も花見客が殺到した。殊にそのような人出を当て込んで、二軒屋界限では人形浄瑠璃芝居を始め、寄席や見世物から歌舞伎など諸芸が小屋掛けでそれぞれ興行され、城下や周辺農村の人びとを対象とした興行が日常的に行われ、芸能文化を成熟させる拠点として繁栄した。まさにこの二つの郡町と拡大の一途を辿った市中の色街は、阿波が有数の芸所として知られるようになる拠点を形成し、城下の盆踊りを盛り上げるうえにも、その情報発信基地としての機能を備えていたのである。

元禄期における城下の経済発展と、町人たちの生活様式の変化には著しいものがあつた。とくに商家などでは夜に生じる余暇を楽しむとする風俗が、広く定着するのは三都の町人社会と共通する現象である。こうして夜を楽しむために、徳島城下の町人たちの間では寺社参詣の風習が浸透し、昼間にも遊山や茶屋遊びなどが楽しめるようになってくる。その一端を次の史料は伝えている。そこで当時の史料から夜の寺社参詣が流行した状況をみることにしよう。

一御山下寺社え夜参詣之義、只今迄御禁被成候、然所、近年右之仕合寺々殊之外迷惑仕旨、中内惣右衛門段々申聞候、何も相談之上、向後寺社夜参之義御赦免被成候、然とも屹と相触ニは不及候、左様之寺々え其儀申聞³³せ、町横目之者共ニも申聞候様申渡之、尤、向後夜参仕段不苦旨申聞せ候様申渡之

これは元禄六年（一六九三）に出されたもので、寺社の側から夜参りの流行で迷惑していると訴え出ている形式をとっているが、夜参制禁下の参詣者にどう対処するか、寺院として迷っている様子が読み取れる。寺院の本心は藩が制禁を撤回し、自由化して迎え入れることができれば、寺院の収入も増えることを期待していたであろう。こうして藩では在来の制禁を廃したが、その措置を広く知らせると、多数の参詣者で混雑し、その取締りが容易でな

くなることを考慮して、密かに事を運ぶことを命じ、町横目の取締りにも期待を寄せているところに注目させられる。そこにも武家対策を優先させていることが知られるであろう。こうした城下町人の遊興的習俗は、もはや際限がなく市中に蔓延するが、次の史料も同年に出されたものである。

一御山下近処之川筋え此節涼舟余多罷出、市中よりハ鼓三味線等之鳴物致持参、其外法外之駄有之、陸よりも件之舟え対し何かと悪口等申懸、無作法之族も有之旨二候、此以後神妙二仕、涼舟は格別、右之通鳴物等持参法外之為駄並陸より法外共二急度停止可被申付候、以上

六月廿九日

津田寛兵衛殿^{②4}

この史料でも読み取れるように、元禄期には上層の町人たちの間では夏の川遊びとして川筋に涼舟を浮かべ、三味線や鼓の音を川面に響かせて楽しむという遊びが流行したことを伝えている。ところが当時の町人社会では階層分化も表面化すると、こうした遊びのできない下層町人は、岸辺や橋上から涼舟に対して悪口雑言を浴びせかけ、溜飲を下げるというような悪習も目立つようになったことを伝えていて興味深いが、その取締りに町奉行も腐心していた事情を知ることができる。

ここに用いられていた三味線は細棹であろうが、それ以前には主として太棹が用いられていたことを考えると、川遊びに限らず元禄期には鳴物の主流が甲高くて派手な細棹の音に代わったことによって、その芸能文化にも決定的な変化がみられるようになったと考えられる。市中の盆踊りに欠かせない鳴物の主流にしても、それ以前には琵琶や太棹を用いていたものが細棹にとって替ると、その重量も軽くて使い易く、その普及は急速であつたし、若い娘たちも細棹に親しむようになって、必然的に盆踊りに加わる人びとも増加の一途を辿っていた。そんな細棹三味線の甲高い浮き立つような伴奏が鳴物の主体として登場することによって、盆踊りも高揚し集団の大型化も可能

となつて、市中は到る所で一丁廻りの練行形式の踊りで路上は埋め尽くされるようになったし、踊り子たちの衣裳も当時の経済状況を反映して華美なものに変化する。こうした変化を背景として商家では、娘たちに幼少のころから三味線を習わせることが、親たちの務めのように考えられ、こうして習得した三味線の技倆を披露するために、師匠が率いる弟子たちが盃蘭盆の昼間の市中を流し歩くことが始まるが、この三味線流しに娘を送り出す親たちは、毎年のように衣裳を新調し贅の限りを尽くして競い合つたので、これを衣裳競べとも称したという。とくに大店の娘ともなると、その後から店の若衆が大団扇で風を送るなど、いまではちよつと考えられないような力の入れようであつた。そのような衣裳の新調で盆には呉服商を始め商いも活気に満ちたので、それを盆景氣と呼んで、藩でも盆景氣の高揚に期待するところがあつた。また男性の場合にも盆ごとに着物を新調し、極端な場合には袖を通す前に着物の所どころを線香の火で焼き穴を開けたものを着て盆踊りに加わつて粋を誇示したという伝承もあり、元禄期の盆踊りは信仰に基いた盆踊りから、踊りを楽しむだけでなく、見物人をも楽しませるような踊りに変化を遂げる画期的な段階にあつたといえるであらう。

そのような踊りに変化をもたらせるうえで、大きく関わつたのは藍商や肥料商たちで、江戸や大坂で顧客を接待し、藍大尽といわれるような大盤振舞いの機会に馴染んだ歌舞伎や人形浄瑠璃芝居を始め、宴席において習い覚えた諸芸を城下の色街で披露するなどしたものが、市中に伝わり、従来の盆踊りなどに決定的な変化をもたらしたことは明らかである。しかし、藍商たちの場合には城下の料亭などでは藩の役人などとの接渉や売場株仲間の寄合いが主で、派手に振舞うようになるのは、藍大市が城下に設定され、徳島城下で顧客を盛んに接待するのは文化期以降のことである。むしろ顧客接待のために大盤振る舞いを続けていたのは肥料商たちであり、色街の隆盛を経済的に支えたのも彼等であつた。もちろん城下の肥料問屋は金肥の売り込みを図つて在町の肥料商たちを、盆や秋祭りなどの機会を捉えて派手に接待したもので、それが町人文化の波及に大きく反映されていった。肥料の販売が大型

化したのは、藍の栽培には二月の地拵えから夏の土用を控えた留肥まで、七度に亘つての施肥に大量の金肥を必要としていた。そのため藍作は肥食い農業とか金食い農業といわれ、それほどの施肥をしなくては良質の葉藍を收穫できなかったのである。藍作農業において肥料の占める割合などについては、既に先行研究³⁶によって明らかにされているが、本稿ではそれに触れず、肥料商の動向を紹介するに留めた。

四、徳島城下における都市文化の展開

徳島城下において都市文化Ⅱ町人文化が、貞享・元禄期においてどのような社会経済的背景の下に展開したかについては前節までに概略を明らかにしたうえでそこで力説しておいたように、当時の藍経済の発展と密接に関連した現象であることも述べておいた。ところで城下における町人文化、とくに芸能活動の盛り上がりや、寺社参詣・遊山の大流行も著しいものがあつたが、それら町人社会における著しい流行は、決して徳島城下にだけみられる現象ではなく、江戸や大坂を始めとした諸地域にもみられた元禄期特有の現象であることはいうまでもない。しかし、徳島城下だけに展開した現象も多分にみられ、元禄期都市文化の形成に重要な契機を与えた藍商や肥料商の動向にも注目しなくてはならないが、こうして徳島の地域性を濃厚にもつた芸能文化の異常な盛り上がりは、城下の武家社会にも多大の影響を与えずには済まされなかつた。そうした部分的な問題については、既に前節までも触れておいたが、ここでは藩体制を動揺に導くような特殊な現象を紹介しながら、さらに検証を試みることにしようと考えている。

貞享・元禄期における全国的な木綿生産の激増に伴って、その染料として阿波藍の需要は急速に高まるが、同時に先述のように良質の藍を栽培するためには大量の金肥を投入することを避けられない。こうして藍や肥料の取引の場として発展しつづけたのが料亭や茶屋から芸妓置屋の増加と繁栄であつた。藍商や肥料商の多くがその取

引きを有利に展開するために、色街の料亭や茶屋に顧客を接待し、大いに楽しませることは当時とすれば決して避けられなかったもので、それを当て込んだ料亭や茶屋は急激に大規模な色街を形成していく必然性があつたといえるだろう。しかし、そうした豪華な酒宴や茶屋遊びは一見華やかではあるが、藍や肥料の売り手にとってみれば、まさに戦場であつて、経営の盛衰を分かつ修羅場であつたものと考えられる。とはいつても色街での大盤振る舞いが日常的に行われ、つねに三昧の音や歓声で浮き立つようなこの騒ぎは、窮迫を余儀なくされていた武家、とくに若年の侍にとっては憧れの的であつたし、多少の遊興費を手に入れば色街に足を運んで互に日頃のストレスを発散し、遊び戯れたのも自然の成り行きであろう。そうした若い侍たちの茶屋遊びは、明らかに商人たちの接待行為の真似事に過ぎなかつたのであろう。しかし、財政難で知行が削減されていた当時においては、茶屋遊びのために必要な遊興費を手に入れるのは極めて限られた重臣たちの子息のみで、他の大多数の若い侍衆には到底その欲望を満たすことはできなかつたであらう。そこで若侍たちは知恵を集めて茶屋遊びのための遊興費を稼ぐ手段を思いついたが、それは早俄と称するもので、歌舞伎衣裳を身につけて、歌舞伎の演技を真似て組踊りや俄を商人たちの宴席に招かれて披露し、いくらかの礼金を稼ごうとするものである。もとより武家は寛文十一年の盆中における禁足令によつて、盆の三日間に演じることは厳禁されていたので、それを避け盆の前後に演じたものと考えなくてはならない。それにしても彼等がそのような芸を披露するには、衣裳を調え、鳴物として最低でも三昧線が弾ける者の一人や二人はいなくてはならないし、また僅かでも稼ぐためには日頃から稽古を積んでおかないと演じることはできない。そのように考えると元禄期に城下の色街はもとより、町人社会で盛り上りをみせた芸能文化が武家社会にも受容され、とくに若侍たちの間に深く根付いていた理由が考えられる。また盆の白昼に街頭の処々で、藍商人などが演じて人氣の高かつた衣裳俄などを観て稽古を積み重ねていたことが考えられる。さらに面倒なのは衣装をどうして調えるかということであらうが、それには古着屋などが衣裳を揃えていつでも注文に応じて貸し出すだけでなく、

演じる場所を指定しておくに必要なだけの衣裳や鳴物などを取り揃え、宴会場まで運び込んでおくような商行為が成立していたものであろう。このような手段をとらない以上、歌舞伎衣裳や鳴物などの大きい荷物を、それぞれ自前で持ち込んだりしては、この試みが発覚する可能性が高かったからである。そのように考えると、若侍たちの集団による早俄を演じるための条件は市中に整っていたものと考えられ、こうした武家による裏の芸能興行が始まったのも元禄期のことであろう。

また、こうした早俄を演じるには、当然商人たちの間に招いてくれるように売り込んでおくことも必要で、そのような場が茶屋遊びで知り合う旦那衆との交渉で契約が成立したことも確かであり、ここにも武家の多くが色街に出入りすることが常習化していた結果であるといえるであろう。その発生が元禄期だと結論づけることは無理だと批判されそうであるが、俄の流行や三味線を主体とする鳴物の充実、色街が藍や肥料の取引きの場として定着してきたように、当時の諸般の事情を考え合わせると、早俄は元禄期の所産であつたと結論するのが妥当だと考えられる。

早俄に関する当時の史料は見当たらないので、少し時代が降るが宝暦期のもを用いて考察を深めよう。

一盆踊之義は先達て相触候通二候、然処、御家中嶋々ニて頭取之者多組踊又は歌舞伎鉢之義相企、種々之鳴物等を相用、盆後ニ至り此節迄も処々え相招、座敷ニおいて令興行候族有之趣相聞、風儀えも相懸り、別て如何敷義不心得之事ニ候条、屹と可申候、万一指止メ可申候、万一此上不愼者有之候ハハ、無御手当被仰付候間、右之趣各より急々可被相触由、御目付中え覚書申渡之³⁷

以上に述べてきた家中の侍たちによる興行は、盆中の規制を避けて盆後に行われていたと史料では明記されているが、武家のこうした芸人的振舞いを藩として見逃がすことはあり得なかった。とくに商人たちの酒宴に武家の組踊りや衣裳俄が演じられ、身分上の主客が一時といえども逆転するということは、町人の優位性を認めるという意

味で、当分の間は表立った取締りを避けていたものと考えることができそうである。いずれにしてもこうした盆後の興行は、町人社会における茶屋遊びの風習や芸能文化の成熟していった元禄期の城下における新たな風俗が、武家社会に強烈に反映した結果であると考えられるが、元禄始源説を実証しながら明らかにしていくためには、今後に残された課題に立ち向かっていかななくてはならない。

その後の経緯について考察すると、城下において武家の権威が大きく低下し、町人たちの間では武家に対する無礼とされる行為が目立つようになるのは享保期のことである。その状況に関しては別稿⁽²⁸⁾に詳述しているので参照されたいが、その背景には藍の売れ行きの不振による経済活動の停滞がある。そのような元禄期以降の変動については、別稿⁽²⁹⁾を参照願えれば幸甚である。ただ徳島城下の経済活動の動向や都市構造の変化、それらを背景とした諸階層の生活がどのように営まれていたかについて、本稿では十七世紀から十八世紀に移行する元禄期における断面についてその大枠を提示し、その特徴を明らかに捉えることを狙って叙述をすすめてきた。その結果として徳島城下町の動態面の特徴が明らかにできればよいと考えて努力してきた心算であるが、そのためには藍商や肥料商など、当時の経済活動と町人文化形成に主導的な役割を担ってきた新興商人が、全国的な木綿生産の展開を背景として、藍や肥料の流通機構の構築にどのように関わってきたか、また藍商の台頭を吉野川流域の郷村部の藍作人や小藍師たちがどのように支えてきたかについて、いまだ掘り下げた検討の必要性を痛感させられている。実はそれらの動向が断片的にでも史料に裏付けられ、実証的に明らかにされなくては、町人文化、就中芸能文化が城下を始め領内に広範な波及をしていった史実を歴史的に把握することは困難である。徳島藩政下における以上のような動向がある程度まで検討できる手掛りとしての史料が存在しているのは、主として化政期以後のことだとされていることを考えると、元禄期前後を対象とするこの種の研究が多くの困難を伴うことは止むを得ないといえる。しかし、そのために研究を放置することは許されないことである。そのような状況を認識した上で、今後の研究の重点として

は、その前後の段階の動向との間において元禄期を位置づけつつ、再検討作業を根気強くすすめることと、江戸・大坂を始めとする藍市場における阿波商人の経済活動に注目しながら、徳島城下に対する芸能文化の伝播などが、どのような形で定着していったか、またこうして定着した城下の芸能文化が、どのように商業活動と結びついて藩外に拡散していったかについても、ある程度は明らかにしていかなければならないと考えている。

ところが徳島城下の芸能文化、その一例である毎年の盆踊りについても、それぞれの段階における変化は激しいものがあることと、町人社会で形成される芸能文化は、必ず武家社会に反映されることによって、本来的な文化に変化をもたらせている。そのたびごとに藩による武家文化の展開に、厳しい抑圧の措置が講じられているが、そのような藩の政策について詳細な検討を加えることから、藩の芸能政策の政治的意義を明らかにすることもできるであろう。そうすると本稿は、元禄期における芸能活動と領主規制の一面と、徳島城下町の都市文化の輪郭を示したに過ぎず、これに肉付けするための大半の作業については、今後の課題としなくてはならないので、史料の発掘や検討を含めて地道に取り組んでいかざるを得ないと考えている。

註

(1) 後藤捷一は、三木与吉郎編『阿波藍譜・史話図説編』

(昭和三十六年刊) 一〇七頁において、天文十年(一五四

一)ごろ堺から細川・三好氏の本拠勝端に青屋四郎兵衛父子が来住して藍染仕法を伝え、三好長治の保護を得て富み栄えたことを述べた『三好記』に注目し、私見であるとした上で、当時の阿波で藍を「作るも染めるも知つてゐたが、そのどちらも非経済・非効率的就業であつたのが、青屋父子の技法導入によって飛躍を画したものと解したい」と記している。

(2)

藍方役所は徳島藩が阿波の保護奨励と統制の元締めとして設置した役所で、それまで藍生産の中心が麻植郡であったが、正保四年(一六四七)までの二十余年間に板野・名西・名東・阿波の各郡に拡大し、その頃から藍玉に砂を混入することによって商品化が大きすすんだ。

藍玉の藩外への大量移出は徳島城下の芸能文化を醸成させる契機となつたことも注目される(西野嘉右衛門編『阿波藍沿革史』昭和一五年刊、二二頁所収)。そのよ

うにして明暦・万治期(一六五五―一六〇)の栽培面積は数百町歩(同書、二二頁所収)に達したとされている。

延宝六年（一六七八）前後になると、「阿波藍の声価は漸く高く、遂に嶄然頭を顯はすや、江戸・大坂の売場は勿論、全国枢要の地に売場を開設せんとするの隆運に嚮つたため、諸国の当業者は大いに之を注視し、動もすれば之を模倣せんとするの兆さえ出で」（同書、二五頁所収）始めたときまで記している。また寛文元年（一六六一）に菱垣廻船が運航を開始すると「漸次東西両府の有無通じ、江戸の商業は俄然として振興し、従つて消極的退嬰は最早時勢の許さざる所となり、元禄七年遂に各組合相連合して組合仲間を組織した」（同書、二九頁所収）というが、「我が阿波藍の如きも亦当時既に三十余の間屋を有して、盛んに移出販売に従事」（同書、同頁）していた。こうして関東売りについては「私共藍仲間商売之儀、寛文中方御当地へ追々出店差出、銘々渡世仕罷在候由」と「関東売荷積所跡書帳」（同書、二七頁所収）にあるように、寛文中から江戸進出を果たしている。また大坂市場については記録こそ発見されていないが、既に寛文以前から進出していることは確実であろう。後藤捷一の考証によると「正保末（一六四七）年まで、栽培は麻植郡から板野・名西・名東・阿波各郡に蔓延し、藍玉へ砂を混入したのもその頃からといふ。明暦・万治期には板野郡藍園・住吉・応神・川内・北島等はゆるる藍園二十八ヶ村―現板野郡藍住町辺―を中心に作付面積も数百町歩と躍進している」（『阿波藍譜』）とし、さらに寛文期には「大阪・江戸に阿波藍取扱業者ありといはれ、その十三年（一六七三）藍砂混交を非とする大坂

側の出訴事件が惹起せられてゐる。またその頃江戸にあつても問題となり、阿波名東郡今切村長尾五左衛門が藍師の総代となつて幕府当局に弁疎に努めたといはれ、かくて延宝・元禄（一六七三―一七〇三）期には、さらに藩外移出は躍進して販売の基礎は確立した」（同書）と結んでいる。このような藍市場の拡大がみられるようになると、徳島藩では藍の流通統制に乗り出し、財政収入を新たに得るための行着銀制度を立ち上げ、その実効をめざして延宝八年（一六八〇）に公儀に願ひ出て藩札Ⅱ阿波札を発行したが、後藤は行着銀について享保十九年（一七三四）の事例を挙げて、「阿波から他所へ移出した藍玉商売の回収現銀を当地へ持ち帰った際、かならず銀札場へ届け、沓俵につき最高限度銀拾匁を楮幣と交換することを要し、拾匁を超える金銀は勝手次第でよい。但し、現銀と藩札との交換率は前者六拾沓匁二分に対して、後者六拾匁となつた。つまり差額一匁二分が藩の収入となるのである。これを行着一步相―實際は二%―と称した」（同書）と解説する。こうして江戸と徳島の為替業務を大坂において阿波の網干屋菟右衛門が正徳期（一七一―一七五）に開始するなど、藩も統制を次第に強化している。大坂市場では大坂留守居役の「大坂藍問屋初之事」という答書に「此義、段々相調候而も、往古之義ハ諸事不相分、元禄之末、井村茂作在勤之頃ハ荒増相見ハ候得とも、是以始末不相揃、右問屋之始り之義、何ッ頃方と申事不相知候得とも、承伝候処ハ、年久敷荷主と相對二而藍引請、致商売来候由」とする史料を挙げ

- て、「大坂は我が阿波よりして海路遙く、拓けば応へん指乎の間に在り、従つて我が当業者が彼地に之が製品の移出を試みんこと、其創業當時に於て最當然の所為と言はなければならぬ。況んや城・摂地藍の競争者が既に存する以上、逸早く之と拮抗する必要あり、其の移出乃至販売が江戸へのそれに先立つに十二分の理あるに於てをや」(『阿波藍沿革史』二八頁所収)と記しているように、寛文・元禄期は江戸・大坂に対する大量出荷体制を早期に確立するとともに、藍商は積極的な藍玉の売り込み段階にあつたものと推察できる。藩はまた慢性的な財政難を改善するために、元禄十五年(一七〇二)五月に至つて仕置家老賀嶋出雲は、相模以東の関東売藍商に対して問屋着仕方を厳命するなど、藍商を刺激していることも注目され、そのような背景の下に藍玉売込み競争も激化すると、必然的に顧客の取り込みをめざす大盤振る舞いを通じて藍商たちが芸能文化を開花させる地盤も必然的に強まっていったものと考えるべきだろう。
- (3) 永原慶二著『新・木綿以前の事』(中公新書、一九九〇年刊)、柳田国男『木綿以前の事』(岩波文庫、一九二四年刊)参照。
- (4) 第一節の貞享規制(註14)参照。
- (5) 踊りの集団が町組の境界を越えて踊り出し他町の踊りと競うように踊ること。
- (6) 高柳真三・石井良助編『御触書寛保集成』(岩波書店、昭和三十三年刊)一二三頁所収史料参照。
- (7) 古くは寛永二年(一六二五)に土佐藩が「七月小おとり高知中停止之事」(藩志内編⑥)としたり、鳥取藩は慶安五年(一六二二)に「毎年之儀二候え共、盆之前後、御法度下々堅可被申付候」と前置きして横目衆に命じて踊りの町切りと、家中侍の禁足違反を取締らせている。(藩法集・鳥取藩、創文社刊)所収史料参照。
- (8) 大阪府史編修委編『大阪府史第七卷』(大阪府、一九八九年刊)三一—三四頁所収。
- (9) 前掲『阿波藍沿革史』や『阿波藍譜』の史話図説編、史料編上中下巻など参照されたい。
- (10) 蜂須賀家政が天正十三年(一五八五)に阿波に入部すると早速徳島城を築城するのと併行し、領内九か所の要地に支城を置き、家老級の重臣を城番とし三百宛(脇城のみ五百)の兵員を預けて警備させた。岡崎・西条・川島・脇・大西・一宮・富岡・仁宇・鞆の九城である。
- (11) 前掲『御触書寛保集成』同頁所収。
- (12) 前掲『御触書寛保集成』同頁所収。
- (13)・(14) 寛文十一年と貞享二年の規制に対する比較検討は、当該研究の重要なテーマで、両規制の経済的背景や徳島城下の構造変化に絡ませた比較検討がとくに重要視されなくてはならない―拙著『阿波踊史研究』第II部第二章を参照されたい。
- (15) 町屋の空地が家屋で埋まり踊り場が街頭に求められるとともに、人口の城下集中がすすみ踊りが大規模化したことに注目しなくてはならない。一丁廻りは盆踊りが掛け踊りと化したものと解釈できる。
- (16) 岡田鴨里編『蜂須賀家譜』(東洋社、明治九年刊)二

八頁所収史料。

(17) 前掲『蜂須賀家譜』五八頁所収史料。

(18) 前掲『蜂須賀家譜』五八頁所収史料。

(19) 前掲書『藩法集』③徳島藩「一八六頁所収史料」。

(20) 徳島県編『阿波藩民政資料』（県物産陳列所、大正三年刊）一〇三六頁所収史料。

(21) 四国大学図書館蔵書文庫本。

(22) 徳島藩の元禄期には阿波藍の販路拡張、それに基く商品経済の大型化や城下町の繁栄がもたらされた反面、藩財政の悪化は寛文期から好転せずに慢性化し、とくに家臣の生活は窮乏化の一途を辿っていた。既に財政悪化は慶安元年（一六五〇）から顕在化し、この年春に藩は家臣に「今年より三ヶ年之間御家中三步懸被召上旨申伝」（県史編委編『徳島県史料』第一巻「阿淡年表秘録」）

『徳島県、昭和三十九年刊』二五頁による）えている。また延宝八年（一六八〇）三月には家臣に十九か条に及ぶ諸事御法度を出し、例えば「前略、我等居処一間之外畳改義停止畢（中略）勝手振舞献立一汁三菜・肴一種可仕」とか「家中諸士茶話候義、弥堅停止之事」から衣類のことまで詳細に規定し、儉約方を厳命し「若違背之輩於有之ハ、横目之者共見付次第第二可剝取事」（『阿波藩民政資料』四四九―五一頁）とし、さらに同年十月十八日には「御家中諸士俸禄之内歩一被召上旨被仰出」（前掲『徳島県史料』第一巻二二二頁所収）ている。なお元禄元年（一六八八）六月十四日になると「御城へ御家中諸士被為召稲田九郎兵衛・長谷川主計列座二而御勝手御

不如意ニ付御家中之者共知行物成御扶持御支配之内暫指上御満足被遊候、近年何も勝手迷惑仕旨被聞召届候条、当秋方被召上間敷候御勝手之事候へば追々被仰聞儀も可有之候、弥儉約相守取続候様可相心得之旨御意候、右之通被仰出候上御通之御目見被仰付」（前掲『徳島県史料』第一巻二二六頁所収）と記しているように、知行借上はこのたびは召上げないが、勝手不如意は改善し難いので家臣一同は儉約を心掛け、いつ召上げの命を受けても即応できる準備を怠らないよう説諭している。いっぽう藍経済が高揚し城下の経済活動も活況をみせ、それを背景として町人文化が展開したことは裏腹に、武家社会の困窮はますます深刻となっているが、そこに元禄期のアンバランスな経済状況の特色がみられる。そのため藩では藍の流通統制を強化し、例えば江戸と大坂を始め多くの藍市場では地元問屋仲間による阿波藍の独占的取引が行われていたため、阿波商人は不利な立場に置かれ、利潤の多くは問屋仲間に吸収されていたとすると、統制といっても藍商が藩内に持ち帰る売上金に加税することしか介入できなかつた。それを有利に運ぶようにするためには、その後の数度に及ぶ藍政改革によりなくてはならなかつた。

(23) 県史編委編『徳島県史料』第四卷（徳島県、昭和四〇年刊）一九四―二一八頁。

(24) 三原市役所編・刊『三原市史』第六卷資料編三（昭和六一年）所収の史料に「国産藍玉相用ひ他所藍不買入染方可仕候、尤、差問候ハ、藍何程買入申度藍何国之旨々

藍座へ申出候様、先達而被為仰付一同奉畏候へ共、御國產藍玉之儀者 先年方種々ト遣試申候得共、御当所水ニ合不申哉、阿州藍ニ而尅遍染候ものハ、三度染漸々度之色合ニ染色も立不申、夫ニ付而ハ手間相懸り職人食事等迄諸入用三増倍懸り、其上藍座之儀ハ広島表之儀ニ而、藍取寄せ申候運送雜費不少、彼是手許大ニ不便利ニ而引合不申候、私共商事之儀御國產藍相用ひ色合注文通染色出来立不申評判不宣時ハ、近世之人気合ニ而追々福山辺へ染ニ遣し候様成行可申儀ハ必然之儀ニ御座候へハ、不得止事、阿州藍仕込取続キ居申候（後略）とある。この史料で阿波藍の品質が地藍に比して秀でていたこと、何とか阿波藍が買入れできるように広島藩に願ひ出ている藍座仲間の苦悩がよく表現されている（同書四四四—五頁所収史料）。

- (25) 前掲書『藩法集③徳島藩』一八六頁所収。
- (26) 『御大典記念阿波藩民政資料』上巻（徳島県、大正五年刊）「藩政時代行政司法の状態」四四二—七〇頁参照。
- (27) 『藩署紀聞』下巻（呉郷文庫本所収史料、徳島県立図書館蔵）
- (28) 前掲書『藩法集③徳島藩』一〇七〇頁所収。
- (29) 前掲書『藩法集③徳島藩』一九八頁所収。
- (30) 寛永十七年（一六四〇）二代藩主蜂須賀忠英の下で設置され、仕置に次ぐ要職として中老から任命し、それまで九城の城番が管轄内の地方支配に当たっていたが元和元年（一六一五）の一国一城令により九城廃されるに伴って、城番に代って地方支配を担当すること、さらに家

臣に対する監察機能も行使できた。その後はたびたび制度の改編が行われ、元禄十三年（一七〇〇）の郡奉行制の定着によって廃止されている。

- (31) 前掲書『藩法集③徳島藩』一八七頁所収。
- (32) 前掲書『藩法集③徳島藩』一八九頁所収。
- (33) 前掲書『藩法集③徳島藩』一八九頁所収。
- (34) 前掲書『藩法集③徳島藩』一八八頁所収。
- (35) 明和改革以後のたびたびの藩政改革を経て阿波商人による藍市場の独占的支配を達成したのが文化期で、藍玉取引きも徳島城下で行われるようになり、城下の色街は繁栄し新たな芸能文化を生み出していった。
- (36) 大槻弘「阿波藩における藩政改革」（堀江英一編『藩政改革の研究』所収、御茶の水書房、昭和三〇年刊）など。

- (37) 前掲書『藩法集③徳島藩』四七頁所収。
- (38) 拙著『徳島藩史読本（二）』所収論文「享保期徳島城下の町人社会と藩政」を参照願いたい。
- (39) 右同書（註38）参照。

本稿は二〇〇二年九月に佛教大学鷹陵史学会で報告したものに若干加筆したものである。その間に適切なご指導を賜った竹下喜久男先生には改めて感謝しながら、ご指導に十分応えられていないことを恥入るところである。また大会当日いくらかのご質問とご意見をいただいたが、それに基づく加筆であり感謝にたえない次第である。